

小学校英語における教科書と付属教材の音声指導に関する調査研究

An Investigation into Textbooks and Teacher's Manuals in Japanese Primary Schools: Focusing on their Sound Materials and Instructions

河内山 真理* 有本 純**
Mari KOCHIYAMA Jun ARIMOTO

抄 録

本研究は、小学校の英語教育で使用されている現行教科書、教授用資料および音声・動画資料が、教員の英語音声指導において、利用しやすく適切に作成されているかを調べた。教授用資料については、音声指導に関する記述に大きな差が見られるが、授業時の具体的な指導助言が乏しい。文字指導に重点が置かれている一方で、文字と音声を結び付ける指導において、発音指導に関する記述はバラツキが大きい。音声資料に於いては、遅い速度ではリズムが不適切に録音されているものが多数あり、児童のモデルとして使用するには難があることが判明した。教授用資料の記述と音声不一致していない場合も見られた。結果として、音声と文字指導を中心に扱う小学校の英語教育では、発音指導や矯正指導がほとんど行われない危険性が高いと言えよう。教科書編纂者および出版社には、指導助言や音声収録に関して改善が求められる。

I. はじめに

2020年度からの小学校での英語の教科化に伴い、検定教科書や教授用資料、教材等が出版されている。また、同時に小学校3・4年生の外国語活動も始まり、小学校で4年間の英語教育が実施される体制となった。学習指導要領では、中学年では「音声や基本的な表現に慣れ親しみ」、高学年から読み書きを追加し「英語の文字や単語などの認識、日本語と英語の音声の違いやそれぞれの特徴への気付き」等を促す指導を行う必要性を説いている。文字が入っているものの、つづりではなく、文字の名称と音にとどまっており、聞く・話すが中心だと考えられる。こうしたことから、英語の音声面では、小学校で英語らしい音声に親しみ、日本語母語話者が苦手とする音声の習得が改善されるのではと期待される場所である。河内山他(2011)では、中学校教員は小学校に、小学校の教員は中学校で発音指導をすべきだと考えている傾向があり、実際には互いに指導が十分になされていないことが指摘されていた。英語を指導する担任の多くは、多忙で余裕がなく、英語の特に音声については知識や自信が不足しているために、発音(音声)指導に労力を割けないことが多い。教員の労力を軽減するため、教科書出版社は、丁寧な教授用資料や音声・映像教材を準備しており、付属の指導案を用いて授業ができるようになっている。

本研究では、教授用資料に従えば、英語の音声指導を授業内で行えるのか、教授用資料等で提案されている具体

* 関西国際大学国際コミュニケーション学部 教育総合研究所学内研究員

** 関西国際大学名誉教授

的な指導方法と音声教材について調べ、小学校英語教育における音声指導について分析した。

II. 調査

2.1 検定教科書

小学校の英語の検定教科書は7種類あり、それぞれ5年生と6年生用がある。

小学校の英語の検定教科書は教科化して初めてのものであるが、多くは中学校の検定教科書を発行している出版社が同じタイトルを冠して出版していることがわかる(表1)。この中で、学校図書については、以前はTotal Englishという名称の中学校用検定教科書を発行していたが、現在は廃刊し、小学校英語だけとなっている。また、光村図書は、小学校の英語教科書に合わせて中学校の英語教科書名をColumbus21からHere We Go!に変えている。国語の教科書で定評があり、小学校中学校共によく採択されている。2022年度小学校英語教科書のシェアは、東京書籍が

表1. 小学校及び中学校における英語の検定教科書(2023年度)

出版社	小学校検定教科書	中学校検定教科書
三省堂	Crown Jr. (CJ)	New Crown
東京書籍	New Horizon Elementary (NHE)	New Horizon
開隆堂	Junior Sunshine (JSS)	Sunshine
光村図書	Here We Go! (HWG)	Here We Go !
学校図書	Junior Total English (JTE)	—
新興出版社啓林館	Blue Sky (BS)	Blue Sky
教育出版	One World Smiles (OWS)	One World

57.6%である。また、別の2021年度の教科書採択の概算では、小学校では、東京書籍(50%超)、光村図書(15%)、開隆堂の順で、中学英語の場合は東京書籍(45%)、光村図書、三省堂、開隆堂がそれぞれ約15%となっている。小学校国語における光村出版は60%以上の占有率を誇り、英語教科書の採択に影響があったと推測される。なお、現行の教科書は、2018(平成30)年に検定が実施されたもので、2023年度の教科書検定を経て、2024年度からは新しい教科書が使用される。本研究で調査したものは現行の教科書である。

2.2 対象

調査対象は、小学校5、6年生用の英語検定教科書7種類(表1)、および各出版社から提供されている教授用資料と音声一式である。教授用資料は、各出版社で名称等の違いはあるが、概ね、児童用教科書に赤や青字での解説や解答が入った朱書き教科書、評価・解説を含む年間計画や各授業回の過程の資料、ワークシートなどアクティビティ用資料、音声や教科書本文等を格納したデータCDやDVDで構成されている。

また、音声についてはCDやDVDに格納されているほか、教科書出版社のウェブサイトで音声のみ、映像付き音声などの状態にアクセスして利用することができる。この音声や映像は、デジタル教科書やCD等に格納されているものと同じである。ただし、web上にすべての音声が開示されているわけではない。

このうち、各授業回の時間配分やワークシート等の資料中で、音声指導に対する教員向けの専門項目や用語の説明、音声を扱うアクティビティでの指示文や説明、また付属する教材の音声とそれに関する指導書中の記述について調査を行った。音声に関しては、アルファベットの読み、ジングル、チャンツの項目や活動を対象とした。歌については、メロディー等の英語音声とは別の要素があるため、今回は対象としていない。

「チャンツ」は、単語、フレーズ、短い文などにリズムをつけたもので、口を慣らし、発音やイントネーションを身につけることを目的に用いられる。また、小学校英語教育における「ジングル」は、アルファベットの文字の名称と音に馴染み、覚えられるよう、リズムカルに唱えられるものを指し、文字名称、発音、その音から始まる単語が1セットになっている「アルファベット・ジングル」を指すが、教科書によっては、動物や食べ物でジングルを作っている例もある。アルファベットに特化したチャンツとも言えることから、フォニックスと同等のものと言えよう。

Unit 6 What would you like? (pp.54-55) 1/8時間			
目標	ていねいに注文したり、値段をたずねたりするやり取りのおおよその内容を理解する。		
主な表現	What would you like? I'd like ~. How much is it? It's ~ yen. など		
準備	指導者用デジタルブック、ピクチャーディクショナリー(PD)、指導者用絵カード、ワークシート(WS)		
時間	児童の活動 指導者の活動 準備物		
導入 7分	<ul style="list-style-type: none"> 挨拶をする。 [Let's Sing] What would you like? <ul style="list-style-type: none"> 曲を聞き、歌えるところを歌う。 [Small Talk] <ul style="list-style-type: none"> 先生からの質問に I like(食べ物) と答える。 	<ul style="list-style-type: none"> 気分や日付などについて英語で聞く。 How are you today? What's the date today? 一度曲を流し、内容について質問する。 PDのpp.59「食べ物」「飲み物」「デザート」を見せ、歌をもう一度流し、歌えるところを歌うよう励ます。 指導者の好きな食べ物を紹介する。 What food do you like? と児童にたずねる。 PDのp.8「食べ物」を参照させてもよい。 	指導者用デジタルブック PD
	<ul style="list-style-type: none"> [Word Link] PDのp.9「デザート」 「デザート」の単語を復唱させる。 [Let's Try ①] 指ボインティングゲーム <ul style="list-style-type: none"> 言われたPDの単語を指す。 指導者の指示絵カードの単語を言う。 	<ul style="list-style-type: none"> 音声やPDを使って、「デザート」の単語を復唱させる。 指導者が言ったPDの単語を指させる。 指導者が示した絵カードの単語を言わせる。 	指導者用デジタルブック PD 指導者用絵カード
展開 30分	<ul style="list-style-type: none"> [Let's Chant] I'd like a hamburger. <ul style="list-style-type: none"> チャンツを聞いて言えるところを言う。 [Starting Out] <ul style="list-style-type: none"> No.1-4の音声聞いて、A-Dの□に聞こえた順に番号を記入する。 答え合わせをする。 音声や映像から分かったこと、気付いたことをWSの1に記入する。 分かったこと、気付いたことを発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> 一度チャンツを流し、内容について質問する。 チャンツを再度流し、言えるところを言うよう励ます。 それぞれの絵の場面や登場人物を確認する。 答え合わせをする。 WSを配り、音声や映像を再度流し、分かったことや気付いたことをWSの1に記入させる。必要であれば、複数回聞かせる。 分かったこと、気付いたことなどを発表させる。 No.3(D)とNo.4(C)の音声や映像をもう一度視聴させ、表現を確認させる。WSを集める。 	指導者用デジタルブック PD WS
	<p>[評価] (注) 相手のことをよく知るために、ていねいな表現を使って注文したり、検討したりすることなどについて、短い話を聴き取らなければならない。</p>		
文字指導 5分	[Sounds and Letters] <ul style="list-style-type: none"> 指導者が続けて言う3文字の名前を聞き、小文字を書き取る。 	<ul style="list-style-type: none"> アルファベットチャートで小文字の名前を確認する。 指導者が3文字の名前を言い、小文字を書き取らせる。 児童の学習到達度により、言うスピードを調整する。 	指導者用デジタルブック
まとめ 3分	挨拶をする。	<ul style="list-style-type: none"> 本時をふり返り、児童の良かったところをほめる。 挨拶をする。 	

教授用資料では、年間指導計画や授業での時間配分まで含めた丁寧な資料があり、その通りに実施すれば授業ができるようになっている(図1)。かつては、教員一人につき教授用資料一式が購入されたこともあったが、経済状況の悪化から現在では教授用資料は共用になっている場合が多い一方で、朱書き教科書は、単独で購入でき、教授用資料一式より安価なため、概ね各教員が持っている。

本研究で、教授用資料を指すときには朱書き教科書も含む。

図1. 教授用資料の例 New Horizon Elementary 5 教師用指導書研究編

III. 結果

3.1 教授用資料

7種類の英語教科書の教授用資料(以下、指導書)の中で、音声指導全般や音に対する専門的解説が載っているものもあれば、アルファベットの文字と発音の仕方を解説しているものなど、音声全般に対する記述には大きな差があった。まとまった解説があるものや、各レッスンの中に少しずつ説明されていることもあるが、巻末や巻頭あるいは途中でコラムのように音声にまつわる項目が扱われていることもある。

また、アルファベットの文字が学習目標となっているため、特に文字の関連で音を扱っていることが多い。音声指導という面では、教科書が提供するアクティビティとしては、各レッスンの中で、歌、チャンツやジングル、文字の読みで構成されていることが大半であった。

授業を実施するための授業案は、年間計画から各授業回の構成まで案が提示されており、各回で音声を取り上げている箇所は、文字の読みやチャンツおよび歌が用いられている。しかし、これらの箇所の各回の授業案を詳細に見てみると発音指導に関する説明は少なかった。教員への指示もあいまい、あるいは逆に解説が専門的で理解しづらく、具体的にどう指導すればよいのかが示されていない場合が多かった。授業案等での発音指導に該当する箇所では、指導する教員の指示として、あいまいな記述が多かった。例を挙げると、「児童が言いづらい単語や表現を練習する」場合に、「音声とともに歌う」「チャンツに合わせて声に出す」とあり、どう指導するのか、聞かせて真似させる、リズムを取る程度しか書かれていなかった。しかし、対話文の箇所で、「～になったつもりで言ってみよう」と誘い、音声を聞かせ、発音やイントネーションをまねして繰り返させる。様子を見ながら何回か繰り返す」という指示も見られた。感情を込めると、イントネーションやスピード、強勢などが変化する可能性が大きく、学習者にも理解しやすい適切な助言だと思われる。

しかしながら、一般的に「まねして発音させる」、「強調して聞かせる」などの表現が多く、うまくまねできないときにどう指導するのか、どう強調するのかなどの具体性に欠けている。音声指導は、とりあえずモデル音を聞かせ指示通りに練習をするようになってきているものの、他の活動、例えば文字指導などに重点を置いて授業を行うような構成になっている。

文字に関しては、大文字・小文字ともに「活字体の文字と結び付け、名称を発音すること、四線上に書くことができる」（外国語指導要領解説）という目標があるため小学校5、6年生の教科書では、アルファベットを繰り返し学習するように構成されている。しかし、発音しながら書かせるように指示しているものもあったが、聞いて書かせることが主で、発音については特に指示等がない教科書もあった。

表2. 指導書中の文字の発音に関する項目

項目	教科書名	CJ	NHE	JSS	HWG	BSE	JTE	OWS
発音記号		△	○					
発音の仕方			○	○			△	
フォニックス		△		○	○			

△：まとめた項目はないが、各単元等の資料の中に必要に応じて説明されている場合

また、ABC チャンツ等で、名称読みと文字の読みを練習させる機会が設けてある教科書が多い。文字と音声を結びつけるよう意図された練習問題等も多く、文字の「名称」と「読み」を学ぶ、あるいは名称だけを取り上げる歌やチャンツ、ジングルはあった。しかし、英語特有の発音指導という点では、「気づかせる」などの説明にとどまっている。目標となる音を指導書に発音記号で示しているものの、それをどう発音すればよいのかが示されていない場合が多かった。アルファベット全体の発音の仕方が、教授用資料に掲載されている場合もあったが、児童向けに発音上の注意点等が説明されているものは少なかった。（表2）

例として、Here We Go！5年生の初めに3・4年生の復習として取り上げられているABCソングとジングルの指導書の該当箇所（図2）では、アルファベットの文字と発音の指導手順として、「①聞いて指で文字を追いながら言う、②音声に合わせて歌う、③ジングルを音声に合わせて歌い、イラストの語を知っているか尋ねる」となってお

り、特に③の過程で学習者がカタカナとの違いに気づくことがポイントだと示されている。ABC ソングやジングルについても指導書にスクリプトは提示されているが、日本語母語話者が間違って発音しやすい音などの注意などは示されていない。

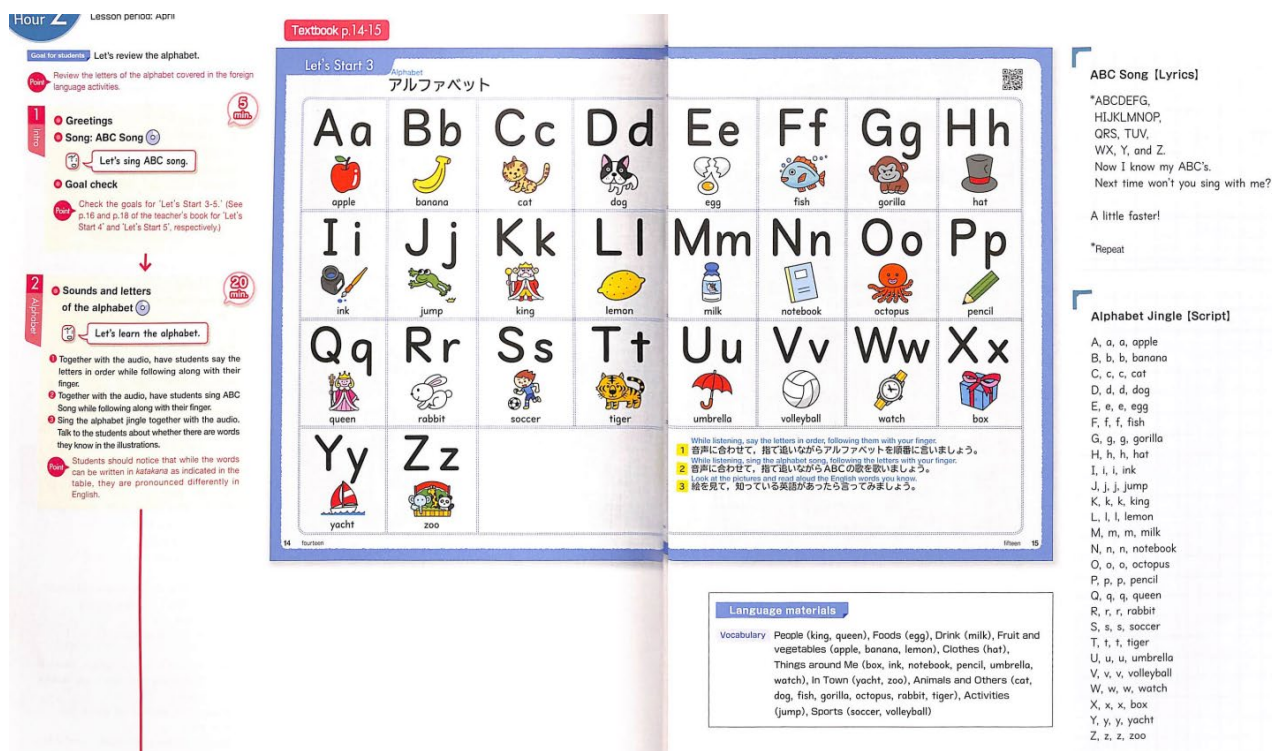


図2. 5年生の最初に復習として実施するアルファベット (Here We Go! Teachers' Book⑤)

全体として、発音指導を取り扱っている箇所は少なく、文字指導（聞く・書く）がメインで、アルファベット各音の発音が多い（2～4社）。また、アルファベットの音声についても、取り扱っている音や取り上げ方にも差がある。例えば、2文字のthは4社が扱っているが、5・6年で複数回出てくる教科書1社、1回だけ3社となっていた。

表3. 発音に関する解説や練習の扱い

項目 / 教科書名	CJ	NHE	JSS	HWG	BSE	JTE	OWS
発音記号	△	○					
発音の仕方		○	○			△	
フォニックス	△		○	○			
母音	△	○				△	
子音		○	○			○	
イントネーション			○			△	○
強勢		○	○				○

△は部分的な扱い

3.2 付属音声資料

学習指導要領では、外国語活動の項で「実際に英語で歌ったりチャンツをしたりすることを通して、英語特有のリズムやイントネーションを体得することにより、児童が日本語と英語との音声面等の違いに気付く」となっており、児童が楽しみながら繰り返すことができるリズムや語句を定着させるための活動として多く採用されている。しかし、チャンツは、単語しか扱っていない1種類を除き、文での練習が多いが、例えば、誕生日を月名を含めて言わせるために、録音が早口になっていて小学生には再現がやや難しいかもしれないもの等があった。また、リズムに重点を置きすぎて、英語らしい強勢の位置や発音が不適切な実例、また記述資料と異なっている音声は予想以上にあった。

チャンツやジングルの不適切な例で、特に多かったパターンは以下の2通りである。

a. 強勢の位置が不適切

b. 個別音の発音が目標の音声と異なる

a.では、本来強勢のないところに、強勢が置かれた音声になっている例が多い。そのため拍数が増え、特にチャンツ等リズムを身に着けてほしいところで、意図とは異なるリズムで再現することになる。付属音声には、速度を変えて格納されているチャンツがあり、その場合に速度により強勢の置かれる語に差がある場合が多かった（例1, 2）。

例1 I /like /soccer / (tennis /volleyball /...). (遅い速度) 3拍

I like / soccer / (tennis /volleyball /...). (通常速度) 2拍

例2 My /name / is / Shoma. (遅い速度) 4拍

My name is / Shoma. (通常速度) 2拍

教科書や教授用資料に書かれている拍は適切でも、音声では異なっているということもあった。特に、速度を変化させた音声を格納している場合に、通常速度では正しいが、遅い速度のものでは、強勢がないところに強勢が置かれて拍がずれるという例が多かった（例3,4）。速度が遅いため、ほぼすべての語に強勢が置かれている例もあった。

例3 When is /your /birth /day? 正しい強勢： When is your /birthday?

例4 Can you /ride a /bicycle? 正しい強勢： Can you ride a /bicycle?

b.では、cat や apple の/æ/の発音が「ア」に近い、lemon, lion 等の語頭のlがdark lで発音されている、hot や dog 等の母音が/a/ではなく「オ」に近い発音になっている等、予想以上に多く、英語のネイティブ・スピーカーの録音とは言い、モデル音声として学習者に示すには問題があると考えられる。

その他に、学習者にとっての速度が問題と思われる例もあった。「繰り返し音声を聞かせ、徐々に発話させる」という指示がある誕生日のチャンツは、リズムに乗って言うには難易度が高過ぎる。指導計画では5年生の5月に単元の8時間の2時間目で行う活動として、曜日と科目のチャンツが示されていたが、指導書の学習計画では「時間割を見ながらチャンツを聞き、教科を指で押さえていく」となっており、聞くだけの活動で済ませている。同じ個所を朱書編では「教科チャンツをして、教科や教科をたずねる表現に慣れる」という指示で、「チャンツをする」は

学習者自身が声に出す活動を示すと推測され、一致していない。また、どの程度練習すれば「表現に慣れる」のか、聞くだけで慣れるのか、声に出して慣れるのか、指示があいまいである。同様に、What do you want for your birthday? という英文を通常の会話文と、チャンツの2種類で練習させる例では、「What と want と birthday を強めてリズムよく」「答えの文では I と book を強める」という指示はあるが、実際の音声では、会話文はかなり速度が遅いためにほぼすべての語に強勢が置かれている一方で、チャンツは普通速度で、強勢指示文通りになっている。同時期の学習であるにもかかわらず、モデルの音声速度にかなりの差がある。また会話文の声が、非常に高揚感のある調子で、速度が遅いことも相まってかなり不自然に感じられた。

このように、実際の音声は、指導書の指示や意図を反映しているとは言えず、問題が多いことがわかった。録音に携わる教科書編集者や出版社が、録音の現場で厳しく確認する必要がある。

IV. 考察

4.1 教授用資料

文字に関する指導が多かったが、その文字指導時の発音指導では、音声を聞かせるだけという場合が多く、学習者に音と文字を結び付けるために、音声を「聞いて」その文字を「見つけ」、文字を「書く」というパタンの練習が大半であった。そのため、学習者が発音する過程がほぼないと言える。New Horizon Elementary の5年生用指導書では「言いながら(文字を)書く」よう指示があるが、6年生では「音を意識しながら(文字を)書く」に変わっており、発音する過程は指示文から消えている。教員自身が音声に関する知識と発音技能を持っていない場合に、たとえば /a/ と /ʌ/ の読みの違いを指導できないため、教科書会社から提供される音声を利用して気づかせるようにできればよいが、児童は発音の仕方がわからない、あるいは音声と授業実施者である教員の音声の違いに気付いても、音の違いは重要ではないと考え、同じ音だと理解する可能性も否定できない。

表4. 教科書の音声の学習計画例 (New Horizon Elementary 年間指導計画等から抜粋・作成)

年 月	学習活動	対象の文字
5	4 活字体を読んだり書いたりする	大文字の名前 (U1) 小文字の名前 (U2)
	9 複数の文字の名前を聞いて書く。アクセントに慣れ親しむ	大文字・小文字の名前 文字の音に対する気づきを促す
	10 アクセントや単語の始まりの音に慣れ親しむ	
	11 単語の始まりの音や終わりの音に慣れ親しむ	
	1 Jingle を聞いたり歌ったりする	
6	4 最初の音が共通の単語の音声を聞いたりして英語の音に慣れ親しむ	各文字に対する音： 子音 (U1-3)
	9 英語の音声を聞いて単語を書いたり音声にあう文字を線で結んだりして英語の音に慣れ親しむ	各文字に対する音： 母音 (U4-6) 2つで1つの音と 長母音 (U4-8)
	1 最初の音が2文字で1つの音になる単語の音声を聞いたりして慣れ親しむ	
	2 「名前読み」となる音を含む単語の音声を聞いたりして慣れ親しむ	

表3の年間指導計画を見ても、「聞いて気づく、聞いて慣れ親しむ」という活動が多く、学習者が適切に調音できるようになる機会は少ない。これは小学校での発音指導が重要視されていないのか、あるいは、指導上困難と考えられて簡略化されているのだろうか。中学校では小学校で十分に音声に慣れ親しみ、当然発音も学んだものとして

指導されているのではないだろうか。依然として発音を学ぶ機会是非常に少なく、あるいは小学校での英語教科化を受けて中学校で発音指導の機会がはかえて減っている可能性さえ危惧される。

4.2 付属音声資料

チャンツでは、単語しか扱っていない1社を除き、文での練習が多いが、例えば、誕生日を月名を含めて言わせるために、早口になっていて小学生には再現がやや難しいかもしれないもの等があった。また、異なる教科書であっても、結果として、同じような単語や英文を用いたチャンツになっているので、教科書独自で作るのではなく、各社および編集者が協力して言いやすいものを共通で用いることはできないのだろうか。無理にリズムに乗せようとして、かなり速度が速いときと、ゆっくりになっているときの落差があった。速度を変えた2パタンの音声を収録しているものもあったが、遅い速度で強勢が不適切になっている等の問題が見られた。チャンツは、「楽しみながら意欲的に英語学習に取り組むことができる」(眞崎 2017)ものではあるが、モデルが不適切な場合は効果に疑問がある。モデル音声を再現できても、自律的に発音する際に「正確さが失われる可能性がある」(石原他 2021)という指摘もされている。また、このカタカナでも使用される語彙を含んだ再現に焦点を当てた同研究では、真似させるだけでなく、両言語の音声の違いに気づかせる必要性も指摘している。チャンツで英語らしい音やリズムを身につけさせるために、まずは正確な音声の提示、次に音声についての指導者からの説明や違いに気づかせるような指導が必要ではないだろうか。

アルファベットを学習させるジングルでは、例えば、「ア」で聞きがちな音/æ/-/ʌ/の区別などの発音指導への助言がなく、文字認識が主な目的で「ジングルをして、文字をなぞらせる」という指示になっていたりする。音声を流したとしても、学習者が適切に再現するには教員の助言が必要であろう。

しかし、実際に、小学校の英語授業では、教員が説明する例は少なく、「聞いて気付かせる、再現させる」という練習パターンが多いため、モデル音声が不適切だと有効な練習ができないことになる。小学校の英語教育開始が早まり、中学校入学までに4年、英語に触れる機会があるので、綴りや文法規則等に労力を払わなくてもよいこの時期に、英語らしい音声に触れて発音を学ぶ機会が学習者に与えられることを期待するが、教材だけを見ても、現実問題として課題が多いことが判明した。

V. おわりに

小学校の英語教科書とその指導書の内容に従えば、「聞く」「書く」活動が多く、実際に発音する機会は少ない。授業では、モデルの音声をとりあえず聞かせて指導が終わる可能性もある。しかし、今回の調査で、そのモデル音声が不適切な場合が散見された。一度ついてしまった発音の癖は矯正しにくいのが、小学校以降の英語教育のどこで矯正する機会が与えられるのか、甚だ疑問である。教材として音声モデルの適切さは必須であり、教科書出版社には音声収録時にその適切さを確認をしてもらいたい。

また、指導書には、音声指導の手順や方法を少し加えるなどの工夫を望む。例えば、文字指導の際「言いながら(文字を)書く」ようにさせるとか、その際、学習者に説明できるような発音上の助言を追加する等であれば、指導する教員に時間的にも心理的にもそれほど負担にならないのではないだろうか。

本研究では、3・4年生の外国語活動という英語教育については取り上げていないが、発音教育という点では今後の調査課題である。

本稿は、2023年8月7-9日に開催された外国語教育メディア学会第62回全国研究大会（早稲田大学）および同年同月19,20日に開催された第48回全国英語教育学会香川研究大会（香川大学）において口頭発表（共同）した内容に加筆・修正を加えたものである。なお、本研究は、科学研究費助成事業（基盤研究(C) 22K00754）の助成を受けている。

参考・引用文献

- 有本純・河内山真理・佐伯林規江・中西のりこ・山本誠子 (2019) 英語発音の指導 基礎知識からわかりやすい指導法・使いやすい矯正方法まで』三修社
- 石原知英, 日高佑郁, 高味淳, 濱崎孔一郎, 金崎英俊 (2021) 「小学校英語における音声の指導：モデルの復唱で身に付くことと身に付かないこと」『鹿児島大学教育学部研究紀要 教育科学編』72, 127-137.
- 河内山真理, 山本誠子, 中西のりこ, 有本純, 山本勝巳 (2011) 「小中学校教員の発音指導に対する意識—アンケート調査による考察—」『LET 関西支部研究集録』第13号 57-78.
- 真崎克彦 (2013) 「英語活動でチャンツを用いて指導した効果の研究」『小学校英語教育学会誌』13, 179-194
- 大嶋秀樹 (2020) 直近の改訂学習指導要領に見る英語の音声・発音指導 英語教育の広がり時代を迎えて『滋賀大学教育学部紀要 人文・社会科学』70, 235-243.
- 文部科学省 (2017) 『小学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説 外国語・外国語活動編』
https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1387017_011.pdf
- 読売新聞オンライン (2021/12/9) 「東京書籍、多くの教科で来年度トップシェア...選定めぐり疑義も」
<https://www.yomiuri.co.jp/kyoiku/kyoiku/news/20211209-OYT1T50095/>
- かえでプロダクション (2023) 「2021年度小学校・中学校教科書採択」
<https://kaede-pro.com/blog/2023/02/10/post-421/>

Abstract

This paper aims to investigate the teaching of English sounds in Japanese elementary schools using seven authorized textbooks (2018-2023) and their attached teaching materials including CDs and DVDs, short movies, or sounds on the web. The results show that teaching materials vary widely in the description of advice for teachers to teach English sounds, i.e., which is of no use to them. Moreover, sound materials have recorded the wrong rhythm at a slow speed, which does not give support not only to the teachers but also to the schoolchildren. All textbooks focus on the alphabet, but they pay little attention to the articulation of each letter. Finally, the authors offer the opinion concerning the editors of the authorized textbooks and publishers to consider sound teaching, especially teaching pronunciation when they make new textbooks.